



## 教える学びから子どもたちの学びへ

校長 土屋 智樹

私は、子どもたちの学習の様子を見ようと毎日各学級の授業を参観していますが、ある児童の夏休みの自由研究の作品が目にとまりました。その児童が挑んだテーマは、サッカーのボールトラップに関する研究で、向かってくるボールをどうトラップすれば上手にボールを止めることができるのか、実験をしてデータを取り、結果を考察していました。私は、その研究内容を読んで、プレミアリーグで活躍中の三苫薫選手が、筑波大学時代に取り組んだドリブル研究のことを思い浮かべました。三苫選手の大学時代の恩師の小井土さんは、ドリブルをテーマにした卒業論文の指導にあたりながら、三苫選手の技術向上へのあくなき好奇心を感じたと、あるインタビューで述べていました。トラップの研究に取り組んだ児童は、きっと三苫選手と同じように、もっとサッカーがうまくなりたいという思いでこの研究に取り組んだことなのでしょう。また、別の児童の作品も、どれもが子どもたちの好きなことや興味のあることをテーマにし、楽しんで自由研究に取り組んでいる様子が作品から伝わりました。このように、「どうしてだろう」「面白そう」などと思ったことについて研究することが、子どもたちそれぞれの学びになっていることが分かります。

ここで、「学び」と似た言葉で、「勉強」「学習」があります。この2つは、どれも「学問・技術（技芸）などを学ぶこと（学び習うこと）」と「学ぶ」という意味を持っています。しかし、辞書で調べると、「勉強」には、「物事に精を出すこと、努力すること」とあり、無理をしても努力して励むという受動的な意味合いがあります。それに対して、「学習」には、「学校で系統的・計画的に学ぶこと、経験を通じて知識や環境に適応する態度・行動などを身に付けること」とあり、主体的で能動的な意味合いが強くなります。本当はやりたくないことをいやいやでも頑張っただけ勉強するよりも、自分から進んで学習することの方が、意義があると思います。そして、「学習」から「習う」を外した言葉が「学び」です。つまり、先生から習う・教わるという要素を外した「学び」こそが一番自ら進んで行う行為であるのです。

ここで、佐伯 胖（さえき ゆたか）著書の『「学ぶ」ということの意味』で書かれている次の言葉を紹介します。

学ぶということは、予想の次元ではなく、むしろ希望の次元に生きることではないだろうか。「こういうことが、いついつまでにできるようになる」ことを目的とするのではなく、いつようになるのか、何が起きるかの予想を超えて、ともかくよくなることへの信頼と希望の中で、一瞬一瞬を大切に、今を生きるということのように思える。（中略）学びとは、終わることのない自分探しの旅なのである。

子どもたちには、「勉強させられる」のではなく、「進んで学習する」という意識をもってほしいと思います。そして、「自分の興味や関心に基づいた学び」は、学習よりも意欲的かつ持続的な成長を促し、変化に対応できる力を養っていくことができると思います。自分がさらに良くなると信じる終わりのない学習意欲、すなわち「学び続ける力」を子どもたちには身に付けてほしいと思います。そのためにまず、私たち教師が行う授業を「学習（教える）」から「子どもたちの学び」へと転化していきたいと思っています。